

放射線大学・社会教育 座長：艸場よしみ（2012.08.15 記）

担当セッションについて

基研研究会 3 日目「放射線大学・社会教育」のセッションでは、2 人の科学者にお話しただいた。いずれも放射線影響について不安と不信がうずまく福島県で、どのような専門的知見を持って どのような手法で、人々と知恵を共有して解決の道を探ろうとしているかの報告であった。

セッションの内容と感想

まず免疫学者の宇野賀津子氏は、

- ・高線量と低線量の放射線を区別して考える。現在の福島は低線量放射線地域である。
 - ・放射線が生体に影響を及ぼすメカニズムのカギは活性酸素であり、このメカニズムは食事やストレスも同様である。
 - ・生体へのダメージは、生体が持っている修復機能を含めて考えなければならない。
 - ・以上を背景に発がんへの影響を考えると、現在の線量では放射線よりもストレスのほうが大きい。
 - ・ただし何をストレスと感じるかは、その人の生活環境や考え方に拠る。科学の正しい知識を基本に、各自がそれぞれの要因を天秤にかけて、生活の仕方を選ぶのが望ましい。
 - ・食事や生活習慣の改善で免疫力が高まるので、ストレスの克服につながる。
- などを語られた。

エイズパニック（一滴の血でも感染の可能性ありと言った専門家の発言が社会的な差別をあおった）の反省や、宇野氏自身の免疫機能が最も低下した体験といった、実感を伴った専門的知見が併せて語られることも、専門家でない人に耳を傾けさせる理由の一つではないだろうか。

今後、ストレスについて科学的解明がさらに進むことを期待したい。

次の水野義之氏は核物理学者として、放射線の正しい知識と現実の生活への応用を、市民と対話しながら共有する「エートス」と呼ばれる手法で模索していて、その具体的な様子を報告された。

印象深かったのは、「専門家は重要な役割を果たさないでほしい」とくぎを刺されたエピソードである。水野氏は、その重要性があとで分かってきたと述べている。これについて、改めてじっくり聞きたいと思う。

対話は重要である。だが親しい仲でも真意を伝え合うのは難しい。とくに、専門家への不信が極まった今回の事態において対話は困難を伴うだろうが、逆に対話を阻む「壁」に気付けたのだと思う。

専門家にはときに、「話すのは得意だが聞くのは得意でない」傾向があるように感じる。

まず「聞いて」ほしい。このとき、「言葉」に含まれるイメージは同じではないこと、話している本人にも真意が自明でない場合が多いことを、理解してほしい。ただし対話で重要なのは、真意を汲み取ることを超えて本質を引き出すことである。

いっぽう市民は「分からない」ことを免罪符にせず、学びたい。ただし専門家と同じにはなれない。インフォームドコンセントで患者が治療方法を自己決定できるようになったとき、それは医者と同等の知識を身につけたからではない。対話を経て、医者は目の前の患者に最善を尽くそうとし、患者はその医者の方針と腕（専門性）を信頼するのである。市民が学んで身につけるべきものは、その専門性が信頼できるかどうかの「目」ではないだろうか。なかなか難しいことだが、まず市民にも対話を成り立たせる努力と、専門性を尊重する態度が求められると思う。

研究会全体の感想

今後どんな社会を目指すかは、みんなで決めないといけない。専門家も市民も誰もが当事者である。最終的には各自の価値基準に依ってくるのだろうが、事実の正しい理解を土台にしないと選択を誤ってしまう。

研究会の最終的な目標は科学的評価を見定めることだと思うが、立場や意見が違う人を建設的な議論に引き込み、批判を歓迎する態度によってそれが実現する。主催者が今回目指した態度は、それであると理解している。

科学のための科学ではなく、イデオロギーや保身のための科学でもなく、世の中のための科学であってほしい。まだ緒に就いたばかりである。今後この試みが深化することを願いたい。